

6. 古い思い出

尾 中 マサオ

※明治28年1月15日生、故甚一妻。

私の郷里は、四国徳島で、義達さん一家と同郷です。明治38年2月、義達貞太郎さん等一行48名は、徳島から汽船に乗り、函館まで4日4晩かかりましたが、船が揺れて、皆船酔いが激しく本当に苦しい船旅で、函館に上陸したときは、蘇生の思い出でした。

義達さんたちは然別（一ノ橋）に、私たちは、下川（その頃パンナヌカナンと言っていた）に到着しました。サンル入口附近に、小林四郎左衛門さんが入っていたという家がありました。小林さんは、内地から直接上興部に来たのではなく、下川に一時居住していたから、上興部に転住したもので、私たちが下川へ来た時は、小林さんは、上興部に移った後だったのです。

義達高蔵（子、蔵）さんは、独身で、私たちより一年程早く然別に来ていて、石丸駅通の通送夫をしていました。この駅通は間もなく、田所新蔵さんが経営をしたようです。

高原弥平は私の兄で、瀬戸牛（西興部）には、鉄道の開通当時に下川から来ており、今の山本伴久さん、安川さんの裏側で「だるま座」と言う劇場をやり、村尾和広さんの処で、矢張りだるま屋という飲食店や、宿屋をやりました。

夫（甚一）は奈良県生れで、流送の本場吉野川で流送を覚え、北海道に渡って、名寄川を中心に流送をやったのです。丸太乗りが上手で、神様と言われ、上興部へ来て、尾中運送店の看板を出したら、神様の家は此所だったのかと、昔の仲間が始終たずねて来たものです。

運送店は非公認だったが、確か昭和6年ころから暫くやり、運送店を止めてから、飲食店を開きました。運送店は橋爪運送店の筋向いでした。